

# 序

「1991年、飛鳥寺東南の小丘陵間にある溜池「飛鳥池」の埋立て工事計画が浮上し、明日香村教育委員会と奈良国立文化財研究所が合同調査をおこなった。この調査によって、7世紀後半を中心に稼働した金属・漆・ガラスなどの生産工房跡が発見され、飛鳥の歴史を紐解く重要な遺跡が、池底深くに眠ることが明らかになった。予期せぬ遺跡の発見は、様々な反響を呼んだが、溜池は建設残土などの廃棄物で埋め立てられることになった。

その後、埋立て地に奈良県が「万葉文化館」を建設することになり、奈良県の委託により1997年から5年にわたって本研究所が発掘調査を実施した。調査が進むに従って、金属・ガラスなどを製作した多数の炉跡、排給水の濾過施設などの遺構、あるいはガラス・金・銀・銅・鉄などのスクラップ類にまざって「富本銭」の鑄造に関わる遺物や、さらには8000点にのぼる木簡群など、古代の生産技術を目の当たりにする稀有な遺構と遺物に遭遇することになった。

遺跡は狭い飛鳥の平地部に向かって東南から延びる小丘陵間の谷筋を巧みに利用して建設した一大コンビナートである。西方の平地には、唐帝国に比肩する海東の律令国家の建設を目指した天武・持統天皇の飛鳥浄御原宮が位置し、その周囲には飛鳥寺・飛鳥京苑池・漏刻台・迎賓館・本薬師寺など宮廷や国家の中心施設が林立している。

飛鳥池遺跡から出土した様々な遺物は、これらの施設に供給する資材や荘厳の工芸品、あるいは国家経済の中枢を担う貨幣などであり、供給地としては至便の地に工房が立地しているのである。出土した木簡群は、工房経営の実態を物語るとともに、飛鳥寺や飛鳥浄御原宮と工房の関係など、律令国家建設期の息吹を今日に伝える貴重な文字史料である。

飛鳥池遺跡の重要性は、古代国家の政治・経済と大きな関わりをもちながら、生産技術にとどまらず社会構造の解明にも重要な資料を提供する点にあり、この重要性に鑑み「万葉文化館」の建設と遺跡保存の調整が図られ、2001年8月13日には「飛鳥池工房遺跡」として国の史跡に指定された。

当研究所としては、貴重な発掘調査成果を一日も早く公開すべく、発掘調査と併行しながら調査研究を進めてきたところであるが、膨大な出土遺物の整理作業に予想外の時間と労力を要し、ここによく発掘調査報告書の出版に漕ぎつけることができた。不備な点も多々あろうが、諸賢の研究資料に加えるとともに、忌憚のないご批判を賜れば幸いである。

最後に、発掘調査の実施から報告書刊行まで、多大なご協力を賜った奈良県・奈良県教育委員会・明日香村・明日香村教育委員会をはじめとする関係諸機関、各種専門の研究分野でご指導とご助言を戴いた研究者の皆様に厚くお礼申し上げる次第である。」

前ページの文章は、2005年3月刊行予定の『飛鳥池遺跡発掘調査報告』の冒頭に掲載することとしていた町田 章奈良文化財研究所所長の序文である。それ以降、今日に至るまで報告書の刊行が大幅に遅延したことを反省するとともに、貴重な遺跡の情報がようやく日の目を見たことを町田元所長の御霊前に報告したい。

2005年4月以降においても、当研究所では飛鳥池遺跡の発掘調査成果の早期公開に向けて報告書の作成作業を継続しなければならなくなった。それは、複雑な遺構と膨大な出土遺物から成る情報の整理及び報告書の執筆・編集に、さらに多くの労力と時間を要したためであった。

また、執筆・編集の作業が進むと、報告書の分量が当初の想定を大幅に超過することも明らかとなった。そのため、本文編、図版編〔Ⅰ〕、図版編〔Ⅱ〕の計3分冊から成る所期の構成に、遺構の全体図及び石組方形池遺構のみを対象とする大縮尺図から成る付図を加えるとともに、本文編を〔Ⅰ〕～〔Ⅲ〕へと3分割し、計5分冊＋付図の構成へと改めることとした。こうして、生産工房関係遺物を中心とする本文編〔Ⅰ〕を、印刷・製本の完了後に保管していた図版編〔Ⅰ〕、図版編〔Ⅱ〕及び付図とともに、ここに公表する運びとなった。ただし、それらの内容は、当初の刊行予定であった2005年3月時点での情報に基づき執筆・編集したものであることも付記しておきたい。今後、土器・土製品を中心とする本文編〔Ⅱ〕は2022年3月に、遺跡・遺構を中心とする本文編〔Ⅲ〕は2022年9月頃に、それぞれ公表する予定である。

なお、本報告書については、当研究所の刊行物及びウェブサイトにおいて、『飛鳥池遺跡発掘調査報告』（奈良文化財研究所学報第71冊）として、2004年度に刊行済である旨の表示を今日に至るまで継続してきた。また、本書及び図版編等の印刷・製本に係る研究所の会計処理に問題があったことも確認した。このような事実と異なる表示及び問題のある会計処理は、本来、あってはならないことであり、関係者の皆様に対しご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げる次第である。

末尾となったが、ご協力を賜った奈良県・奈良県教育委員会・明日香村・明日香村教育委員会をはじめとする関係諸機関、関係各分野の研究者の皆様に対して、改めて厚くお礼を申し上げたい。

2021年12月

独立行政法人 国立文化財機構  
奈良文化財研究所  
所 長 本 中 眞